

● 制作

風景を聴く
～美濃加茂に潜むサウンドスケープの体験～

田口 漱志郎

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 武田 史朗)

TAGUCHI Soshiro

1. 研究の背景と目的

我々の身の回りには、風に吹かれ樹木の葉が擦れる音、川のせせらぎ、街を行き交う人々の足音、虫の鳴き声、雨音など多種多様な音が存在する。しかし、そのような環境音の多くは音楽作品のように積極的に鑑賞されることは少なく、日常生活の中でほとんど認識されないようなものや、騒音として嫌悪されるものも存在する。1960 年代、急速な都市化や産業の発展に伴い、騒音公害が深刻な社会問題になると、工場や自動車などの人工的な音が増加した。北アメリカを中心とするエコロジー運動に代表されるように環境全体に対する社会的関心が高まる中、それまでの物理的制御や規制といった騒音問題へのアプローチに限界を感じていたカナダの作曲家、レイモンド・マリー・シェーファーは 1960 年代末に

「サウンドスケープ」と呼ばれる概念を提唱する。これは個人あるいは、特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音環境と定義されている¹⁾。シェーファーは騒音問題の原因は近代以降視覚が重視され、聴覚についても人々の聴取態度が音楽へ偏向したためだとし、音楽家として責任を感じ、音環境全体を美的聴取の対象とすることによって人々の環境音への意識を高めようとしたのである。サウンドスケープの思想が 1970 年代に普及すると、人間と環境音との関係に関する多くの研究活動やデザイン活動が行われるようになった。しかし、騒音問題は依然として根強く残っているのが現状であり、近年では情報端末の普及によって、街を歩く人がヘッドホンやイヤホンを耳に装着し、生活環境音に対し自ら耳を塞ぐ姿も多く見られる。

こうしたサウンドスケープの思想と問題意識を共有する余地のある表現形態として、「サウンド・インスタレーション」が挙げられる。サウンド・インスタレーションは、時間ではなく空間に規定される芸術であり、室内や屋外に音を設置しその空間や場所・環境を体験させる表現形態をとる作品である²⁾。都市の環境音を芸術的に再解釈するこの方法論は、人々の聴覚的要素、及び環境・風景全体に対する関心の向上を促すことが期待できる。

本研究では、サウンドスケープの思想に基づき、音環境に対する意識を啓発し、新たな風景認識の体験を生み出すインスタレーションの制作を行う。

2. 対象地

インスタレーションのモチーフとする対象地は、岐阜県美濃加茂市内の自然的要素を有する場所として、市民ミュージアム前に位置する森林と木曾川の河原にある化石林公園の 2 箇所を選定した。

市民ミュージアムは地域の自然・歴史・文化に関する展示の他、市内の学校と連携した子ども向けの学習活動も行う、博物館と自然教育センターが併設された市民文化施設である。「みのかも文化の森」の名でも呼ばれる通り、施設が広大な森に囲まれており、敷地全体としては市内中央部に住宅団地として開発された中部台地の一角に位置する。中部台地はかつて森林緑地内に農地や住宅が点在する静かな丘陵地であったが、1970 年代頃から宅地が増加した。その後、東海環状自動車道の開通が決まると、多くの地権者から乱開発の懸念と未利用地の有効活用を望まれるようになり、1996 年から 2007 年にかけて住宅団地、工業地域、公園等を一体的に整備する「美濃加茂市中部台地土地区画整理事業」が行われた³⁾。その結果、図 1 のように樹林地が大幅に減少し、対象地はその名残であったことが確認できる。音環境においても、その土地本来の自然環境が生み出す音と、宅地開発や幹線道路網の形成によって生まれた喧騒が共存していると考えられる。

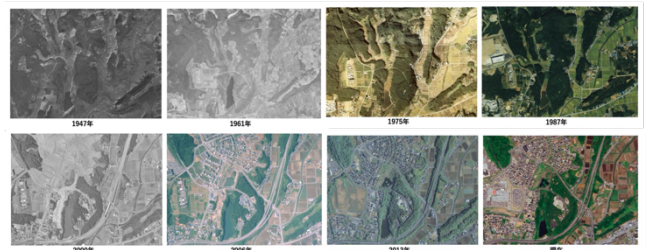


図 1 対象地周辺 航空写真の変遷

化石林公園は美濃加茂市南部を流れる木曾川の北岸、及び太田橋の下方に整備された公園で、1994 年夏の異常洪水で水位が低下したことにより発見された約 1900 万年前のアオギリ科樹木の化石林を観察することができる。また、木曾川の渡船場跡地でもあり、史跡碑が建てられている。木曾川は中山道の宿場町である太田宿があったこの地において、中世後半から江戸時代にかけての物流で大きな役割を果たしていた。大正時代になると、愛知県犬山市まで舟で下る「ライン下り」が始まり、地域を代表する観光事業として親しまれ

ていたが、時代とともに客数が減少し 2012 年に終了している。本研究において木曽川が発する音に注目するインスタレーションを制作することで、自然としての特色だけでなく、この地を生きた人々の営みの場としての文化的景観さえも浮かび上がらせることができるのではないかと考えた。

3. 調査

3-1. 方法

まず対象地の音環境の特徴を把握すべく、現地で素材となる音を録音しつつ、聴こえる音種を調査した。次に文献調査により、サウンド・インスタレーションの構成要素を抽出し、作品形態について理解を深めた。

3-2. 音種調査

図 2 に示した位置にそれぞれ 30 分間立ち、聞こえた音を記録することで、対象地の音環境の特徴を把握する。



図 2 音を録音・記録した位置

その結果、それぞれの場所で図 3 に示した種類の音が確認できた。どちらの場所でも非生物の自然現象を由来とする音、人間以外の野生生物が発する音、人間が発する音と、性質が異なる音が聴こえ、樹木の葉擦れを含む風の音、自動車の走行音、鳥の鳴き声の 3 つが双方に共通して確認された。特に前者 2 つは途絶えることなく常に聴こえたことから、対象地の音環境の基盤となる基調音といえる。一方で、鳥の鳴き声については頻度に違いがあり、森林では途絶えることなく常に聴こえたが、化石林公園では数回しか確認されなかった。また、化石林公園のみ川の水が流れる音が確認され、他の種類に比べて特に目立つ音種であった。これらの違いから、森林は鳥の鳴き声、化石林公園は川の水が流れる音がそれぞれの場所の音環境を決定づける音種であると言えるだろう。なお、現地では周辺の歩道を通行する人が確認できたが、その音は図 2 の位置からは聴こえなかった。

対象地	自然現象の音 (ジオフォニー)	野生生物が発する音 (バイオフォニー)	人間が発する音 (アンソロフォニー)
ミュージアム前森林	風	鳥の鳴き声	自動車の走行音
化石林公園	川の水の流れ 風	鳥の鳴き声	自動車の走行音

図 3 現地で確認された音の種類

3-3. サウンド・インスタレーションの構成要素

サウンド・インスタレーションを制作する上で考慮すべき要素として、(1) 作品の設置状況、(2) 音響的側面、(3) 視覚的側面、(4) 聴衆との関係の 4 つが挙げられる⁴⁾⁵⁾。(1) 作品

の設置状況は音あるいは作品をある特定の閉鎖空間の内部に置くか、開かれた環境の中に置くかという視点である。(2) 音響的側面では音源の数の他、音響の機能についても考慮される。音響的要素自体に美的聴取の対象として強い焦点が置かれるだけでなく、聴覚的ではない効果を狙ったインスタレーション作品に偶然音が付随する場合がある。(3) 視覚的側面については、視覚的要素として画像、オブジェ、映像が用いられることがある。(4) 聴衆との関係はインタラクティブな要素の有無に関する視点であり、観客が作品に関与しない受動的な作品と、観客自身が音を発生させる等何らかの方法で身体的な参加をすることで成立する形態の作品がある。

4. 制作

文献で調査した諸要素を踏まえ、サウンドスケープ思想の問題意識に対応できるインスタレーションを制作する。音環境に対する意識を向上させるためには音響作品を設置して、ただ聴取させるのではなく、聴衆が能動的に音の違いや変化を知覚することが有効であると考え、インタラクティブな要素を含む作品とする。

まず現地で録音した音源の周波数を操作することにより、個別の音種に分離する。次に音源再生用の端末と複数のスピーカーをミキサーに接続し、1 種類の音につき 1~2 個のスピーカーから別々に再生されるようにする。視覚的要素としてモニターに対象地の映像を表示するが、変化のない画像にすることで聴覚に対する意識を高める。そして全ての音種を同時再生することにより、対象地の音環境が聴取者の目の前に広がる。聴取者はミキサーで種類ごとに音量を調節することが可能であり、特定の音を消したりすることで、その土地本来の自然環境を音で浮かび上がらせたり、風景に対する新たな解釈を自ら獲得していくことになる。また、2 つの対象地は 3 分程度ずつ交互に再生され、共通点と相違点が存在する双方の音環境を比較しながら味わうことができる。



図 4 視覚的要素として表示する対象地の画像

引用文献

- 鳥越けい子(1997)：サウンドスケープ その思想と実践：鹿島出版会, p. 60
- 中川克志(2020)：サウンド・インスタレーション試論：音響芸術における歴史のかつ理論的背景：横浜国立大学教育学部紀要. II, 人文科学 3, 57-73
- 公益財団法人岐阜県都市整備協会：美濃加茂市中部台地土地区画整理事業を振り返って
<https://gifutoshi.or.jp/wp-content/uploads/h21/006.pdf>
- 中川克志(2020)：サウンド・インスタレーション試論 -4 つの比較軸の提案- 1/2：常盤台人間文化論叢 6(1), 63-99
- 中川克志(2020)：サウンド・インスタレーション試論 -4 つの比較軸の提案- 2/2：尾道市立大学芸術文化学部紀要 19, 83-91